View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

The English Patient における「歴史」と「物語」*

三　杉　圭　子

Summary

"History" and "Story" in Michael Ondaatje's *The English Patient*

Keiko Misugi

Michael Ondaatje's *The English Patient* seemingly deals with the "history" of the decline of Western civilization which is symbolized by the protagonist, an anonymous dying man called "the English patient," at the end of the World War II. Examined carefully, however, it becomes clear that the novel produces a particular view of "history" which defies a modern, rationalistic, scientific discipline called "history." While the modern, rationalistic, scientific "history" aims to give a linear, orderly, chronological account of what has happened, the "history" as presented in the novel is woven from intertwining "stories" like a tapestry, in which the complex and multiple aspects of past events and their interrelationship are depicted in a metaphoric, imaginative manner.

The view of "history" in *The English Patient* has much in common with that of Herodotus, the Greek "Father of History," whose *The Histories* "the English patient" holds as his commonplace book. First, both books are based on the principle of the mutability of human affairs, as prosperity never abides in time and nothing lasts forever. Then, both books feature a common style of representation which includes : (i) an emphasis on individual "stories" or biographies to account for the "history," (ii) a transcendence of the dichotomy of truth and falsehood which is deeply rooted in the principles of modern, rationalistic, scientific "history," (iii) the employment of a technique of collage which allows plural viewpoints uninhibited by singular, static points of view. Consequently, if modern, rationalistic, scientific "history" tries to analyze and discover the cause of past events, "history" in *The English Patient* aims to represent a comprehensive picture of the lived experience in as lively and vivid a style as possible. If the former tries to prove the veracity of past events, the latter aims to recreate their surrounding situation and context as a whole. If the former tries to present a constructive, orderly account of what has happened, the latter aims to concentrate on the metaphorical, implicit, deep structure of each "story" and to weave a large tapestry inclusive of such crossover elements as biographies, myths, and rumors, as well as of such various genres as literature, geography, and archeology.

The point at which *The English Patient* departs from Herodotus' *The Histories*, then, is in the novel's conscious use of written texts from the past which are repeated in slightly different contexts to convey the novel's particular themes, and finally to create a new text which becomes *The English Patient*. By drawing upon the creative power of each previously written text that weaves the elements of the novel, *The English Patient* becomes a challenging piece of art in which "history" and "story" are intertwined, as Michael Ondaatje pursues his imaginative and creative inquiry into a renewed vision of "history."

Michael Ondaatje の小説 *The English Patient*（1992）は、1930年代から第二次世界大戦を背景に、いわゆる「西洋文明」の没落をめぐる「歴史」小説として読むことができる。ところが、「西洋文明」という概念そのものが、人間によって構築された恣意的な＜物語＞のひとつに過ぎなかったことが認知された現代において、「西洋文明」の終焉という「歴史」のひとこまを語ろうとするならば、その行為そのものが、既に普遍的根拠を失った＜物語＞の中に取り込まれる、という自家撞着を起こしかねない。しかしながら、小説 *The English Patient* における「歴史」観に着目するならば、この作品が示す「歴史」とは、「西洋文明」のひとつの所産として生まれた、合理的、科学的、実証可能な「真理」を捉えようとする直線的記述の様式を指すのではないことが明らかになる。むしろこの小説が提示する「歴史」とは、たんに過去の出来事についての通時的な首尾一貫した記述ではなく、複雑かつ多様な出来事の諸相とそれらの相互関連性を、より比喩的に、想像的に表現している。それゆえ、その「歴史」とは、真実か虚偽か、という二項対立を超えて、一次元的な秩序や直線的時間の流れにとらわれず、ある出来事に関わった人々とそれをめぐる事物の諸相を多元的、暗示的、象徴的に甦らせる「物語」本来の力——時空を超越した想像力——の喚起によってたち現れる。その意味において、小説 *The English Patient* は、近代合理主義的科学的「歴史」観の硬直性を突き崩し、「物語」本来の表現力を駆使することによって、より変幻自在で豊かな「歴史」の広がりを提示し、「歴史」と「物語」をめぐる創造的相関関係を問うた、意欲的作品である。

小説 *The English Patient* は、終戦間近い1945年、戦禍を浴び廃墟となった Florence 郊外の屋敷を舞台に、4人の人物を中心に織りなされる。重度の火傷を負って横たわる名前のない "the English patient" と呼ばれる男、彼の世話をする20歳のカナダ人看護婦 Hana、彼女の亡き父親の友人で泥棒の David Caravaggio、そして連合軍爆弾処理工兵のインド人 Sikh 教徒 Kip こと Kirpal Singh。小説は「イギリス人の患者」の素性をめぐる謎解きを一つの軸として、彼が戦前、北アフリカの砂漠探検に携わっていたこと、探検家仲間の人妻と関係を持っていたこと、ドイツ軍スパイの手助けをしたことなど、その個人的な過去が徐々に明らかにされてゆく。第二次世界大戦という動乱の中で、「イギリス人の患者」は、自ら操縦する小型飛行機の炎上で重症を負い、「西洋文明」のあらゆる知的、技術的、芸術的遺産の記憶を刻み込んだまま、死の床に横たわっている。しかし一方で、彼のアイデンティティーを固有化するはずの、ハンガリーの貴族という出自や、Ladilaus de Almásy という名前はほとんど言及されることがなく、作品全編をとおして、彼はあるレベルではひとつの抽象であり続ける。そして、その存在を何らかの象徴と読むならば、彼は「イギリス」的なもの——言い換えれば「西洋文明」とその所産——を背負った、瀕死の「患者」なのである。モルヒネを打ちながら最期を待つその姿が喚起するのは、イギリスをはじめとする欧米諸国が築いてきたいわゆる「西洋文明」が、麻酔台に横たわり、まさに終焉を迎えようとしているイメージである。

そして、この「イギリス人の患者」をめぐる「物語」の終焉は、アメリカによる日本への原爆投下のニュースとともに訪れる。これは、「西洋文明」の集積が、核兵器という形を得て瞬時にして幾万の人命を奪い去ったとき、その「文明」は、もはや人類の啓蒙や進歩を指し示すことはなく、自己破壊と世界の終わりに向かうより他ないことを示唆している。

このように、小説 *The English Patient* は、あるレベルでは、「西洋文明」の没落という「歴史」を取り扱っていると言うことができる。しかし、厳密に、「イギリス人の患者」の人物造形、そして小説そのものの構成について考察を深めるならば、むしろこの作品には、「西洋文明」のひとつの所産としての近代合理主義的科学的「歴史」観に対する、作者の意図的な揺さぶりを読み取ることができる。つまり、小説 *The English Patient* は、「西洋文明」という既に失われた<物語>に取り込まれることなく、新たに「歴史」とは何かを問い直し、独自の「歴史」観を提示している。確かにこの小説は、第二次世界大戦、そして核兵器の時代の到来、という20世紀に人類が体験した大きな出来事を取り扱っている。しかしながら、それらを語る表現の手法は、決して、合理的因果関係に帰することのできる出来事の統辞的記述ではない。むしろ作者は、登場人物をめぐる一見無秩序で分散的な「物語」の集積の中からたちあがってくる非統合的で複雑多様な総体をこそ、「歴史」として捉えようとしているのである。

この「歴史」と「物語」をめぐる創造的相関関係を論証する為に、まず最初に、小説 *The English Patient* における「歴史」観の基本姿勢を明確にしておきたい。この「歴史」観の基軸は、何よりも、「イギリス人の患者」が座右の書としている古代ギリシアの「歴史の父」、Herodotus の著書 *The Histories* に通底している。[1] 第一に、両著は、万物流転の理を世界観の礎としている。第二に、両著に共通した描出のスタイルとして、（i）「歴史」の担い手としての個人の「物語」の重視、（ii）信憑性をめぐるいわゆる「真実」か「虚偽」かという二項対立の超越、（iii）ジャンルを超えた複数の視点の並置を伴ったコラージュ的手法の導入、の三点をその特徴として挙げることができる。[2] 即ち、近代合理主義的科学的「歴史」観が、出来事を冷徹に対象化して、その因果関係を分析しようとするのに対して、小説 *The English Patient* および Herodotus における「歴史」観は、人々が実際に生きたそれぞれの体験に親密な共感を伴いつつ、臨場感溢れる記述を試みている。また、前者が出来事の信憑性を実証することに重きをおくのに対して、後者は出来事をめぐる状況、文脈の総体的再現を目指している。さらに、前者が全体とそれを構築する部分との統辞的記述を試みているのと対照的に、後者は、個々の「物語」が持つ暗示的、比喩的、深層構造的局面に意識を向け、伝記、神話、流言、記録、あるいは、文学、地理学、考古学などのジャンル分けにとらわれず、それらの連関、およびイメージの連鎖によって、大きなタブローを織りあげようとしている。

以上のような論点を確認した上で、まず、小説 *The English Patient* および Herodotus における万物流転の世界観を正確に把握しておきたい。「イギリス人の患者」が座右の書としていた *The Histories* の著者 Herodotus は、万物は流転し、諸行は無常であるという理をその

冒頭で次のように明言している。

> I will proceed with my history, telling the story as I go along of small cities of men no less than of great. For most of those which were great once are small today ; and those which used to be small were great in my own time. Knowing, therefore, that human prosperity never abides long in the same place, I shall pay attention to both alike. (Herodotus 5)[3]

これに倣い、「イギリス人の患者」とその仲間達は、"We knew power and great finance were temporary things. We all slept with Herodotus"（142）という了解のもとに、砂漠での日々を送っていた。

小説 *The English Patient* において、砂漠では風にまかせてすべてが漂流し、地形さえもが自在に変化する。形あるものは現れては消え、砂漠の民もまた河のように流れては消える。"The desert could not be claimed or owned——it was a piece of cloth carried by winds, never held down by stones"（138）と「イギリス人の患者」が語るように、まさしく砂漠は、地上における万物流転の具現である。この、砂漠によって象徴される万物流転の理念は、小説 *The English Patient* において、「西洋」植民主義の原理に対するアンチテーゼをなしている。なぜならば、「イギリス人の患者」が関わっていた、イギリス王立地理学協会を母体とするヨーロッパ人による北アフリカの砂漠探検は、地理学の名のもとに、砂漠を征服し、支配しようとする植民主義思想の知的表象に他ならないからであり、彼らにとって、砂漠は、地図に記すことによってその漂白を制し、支配する為の対象にすぎないからである。

他方、「イギリス人の患者」は、地図作りに象徴される「西洋」植民主義思想を批判し、"The ends of the earth are never the points on a map that colonists push against, enlarging their sphere of influence"（141）と語っている。「イギリス人の患者」が夢見たのは、かつて Herodotus が、自らの興味の赴くままに諸国を歴訪し、それぞれの土地と人々の生業に目を見張ったような、相互主体的共感を伴った、世界との関わりである。そしてこの「イギリス人の患者」の理想は、地理学上の探求にとどまらず、彼の人間としての在り方に通じている。彼は自らの人間としての生き様を、「西洋」植民主義思想的地理学とは無縁の、自然が生み出す"cartography"に託し、"All I desired was to walk upon such an earth that had no maps"と語っている（261）。このような"cartography"によれば、人は皆、その人生における多くの人々や出来事との遭遇によって織りなされる"communal histories, communal books"（261）である。即ち、個々人の生は、それを生きた人々をめぐる状況と文脈の諸相の中で織り目をつくり、「共同体の歴史」、あるいは「共同体の物語」として構成される。そこには、地図に名を記す固有の私も、またそれに正当性を与える権威も存在しない。「イギリス人の患者」は、地理学に代表される「西洋」植民主義思想を否定し、10余年にわたる砂漠での生活をとおして、ハンガリー人という国籍、Ladilaus de Almásy という名前を自らかき消し、誰にも、どの国

にも属さない男——つまり、彼をめぐる人々に共有される、名前のない、「イギリス人の患者」となるのである。

このように、Herodotus が唱えた万物流転の理は、「イギリス人の患者」の人生哲学の礎として、彼の存在そのものの基盤となっているが、さらに、この世界観は、小説 *The English Patient* 全編を支える構造原理でもある。これを念頭におきながら、次に、この小説における表現の手法および作品の構成——「歴史」の担い手としての個人の「物語」の集積、「真実」か「虚偽」かという二項対立の超越、複数の視点の並置からなるコラージュ的手法——を検証してゆきたい。

第一に、小説 *The English Patient* における「歴史」観が、総体を編み上げる細部の重要性を強調するとき、その細部とは即ち、それぞれの登場人物をめぐって語られる各々の「物語」である。近代の「歴史」の担い手が、国家や民族という大きな集団であるのに対して、Herodotus は「歴史」を個々人の「物語」に還元している。「イギリス人の患者」は、Herodotus が記したのは、"cul-de-sacs within the sweep of history——how people betray each other for the sake of nations, how people fall in love" (119) だと語っている。その意味で、「イギリス人の患者」個人の「物語」はまさしく、その限りある生を "the sweep of history"に翻弄された "cul-de-sacs"の具現である。

小説 *The English Patient* における "the sweep of history"は、「西洋」植民主義の厳然たる展開を抜きには語れない。しかも、この小説において注目するべき点は、「西洋」植民主義の原理が、政治的な支配関係としてばかりでなく、個人的な愛憎関係としても表出することである。それは、「イギリス人の患者」とイギリス上流階級の Clifton 夫妻との関わりにおいて、最も顕著に表れる。「イギリス人の患者」が、名前や国家の概念を憎む男であるのに対して、「イギリス人夫妻」は、支配し、所有する、という形でしか世界との関係を取り結ぶことができず、妻の「愛人」の侵入を契機として、夫の図った無理心中という形で死に急ぐ。しかし、「イギリス人の患者」もまた、所有し所有されることを拒みながらも、この夫妻との関係が深まるにつれて、Katharine Clifton の鎖骨の間の窪みを "Bosphorus" (236) と名付けていとおしみ、彼女をめぐる男達に嫉妬を覚えるようになる。さらに彼は、瀕死の Katharine の救護を求めるに際し、彼女を Almásy 自らの妻と呼ぶことで、彼女に対する所有権を公言する。しかしながら、彼の「非イギリス」的な「名前」は連合軍兵士達の疑惑を招き、砂漠の洞窟に取り残された彼女は息絶える。「西洋」植民主義思想にからめ取られた「イギリス人の患者」は、Katharine に対する独占欲のゆえに、皮肉にも、永遠に彼女を失うのである。

このようなメロドラマ的展開は、一見陳腐にさえ映る。しかしこれこそが、「イギリス人の患者」をめぐる「物語」を、読者にとって親密なものとし、個々人の運命の綾がいかに「歴史」という大きなタブローを織りなしてゆくかを明示する、小説上の表現手法の一環なのである。「歴史」の担い手としての個人の「物語」を語るこの手法は、それぞれの故国を離れて行き場を失い、つかのまの共同生活を送る他の登場人物においても同様である。特に Kip の「物語」は、「西洋」植民主義政策、帝国主義戦争という "the sweep of history"に巻き込まれた人間

の“cul-de-sac”を如実に語っている点で注目に値する。

インド北西部パンジャブ地方出身のSikh教徒Kirpal Singhは、植民地支配を通じて「西洋文明」に心酔し、爆弾除去技術を習得して有能な連合軍工兵“Kip”となる。彼とカナダ出身のHanaとの愛は、“their continents met in a hill town”（226）と記され、ユーラシア大陸と北米大陸との融合が暗示される。しかし、1945年8月、アメリカによる日本への原爆投下のニュースを機に、Kipは「西洋」の人種差別的植民主義の犠牲者としての自覚に目ざめ、ヨーロッパを後にする。「西洋」の従順な息子Kipの翻意は、若干強引な展開ではあるが、この小説において語られる「歴史」が「西洋」による「西洋」のためのものであることを否定し、より多様な背景を抱えた個々の登場人物の「物語」を“the sweep of history”から拾い上げ、それらを、個人の生に密着した「歴史」として浮かび上がらせた点においては、十分評価に値しよう。[4] 小説の終結部には、十数年後、Hanaに想いを馳せるとともに、故郷で家族を慈しむKirpalの姿が描かれている。彼が一族の伝統に従い、「患者」の病を癒す医師になっていることは決して偶然ではないだろう。「西洋文明」が破綻を来した後の世界は、カナダとアジアにおける二人の生存者に委ねられている。

第二に、近代合理主義的科学的「歴史」観が、ひとつの体系的学問として「虚偽」を排斥し、「真実」を語らんとしてきたのに対して、この小説が呈する「歴史」観は、その二項対立の図式を超越するものであることを検証したい。[5] Herodotusはその著作において、自らの見聞に加えて、人々の間に伝わる伝説や回想談を多く記し、あえて物事の「真実性」にこだわらず、伝説や流言を忠実に書き留めることによって、古代の、あるいは遠隔地の人々の生活感を、より説得力をもって再現することに成功している。そして、それこそがHerodotusの「歴史」観の卓越した所以であると同時に、小説*The English Patient*が提示せんとする「歴史」観の表現手法なのである。

この「真実性」の呪縛を凌駕して「歴史」を編み出してゆく「物語」の力は、「イギリス人の患者」の素性をめぐる展開において最も顕著である。小説の終盤において、Caravaggioの執拗な追求により、「イギリス人の患者」の正体はおおよそ明らかになる。しかし、モルヒネの効果のもとに引き出されたこの「真実」に、決定的な論拠が示されることはない。そして、既に生に対する執着を失っている「患者」にとって、このいわゆる「真実」の暴露は、何ら意味を持たない。また、戦時下の諜報合戦の犠牲者であるCaravaggio自身、結局、この「イギリス人の患者」が同盟軍、連合軍のいずれについていたとしても、自分には関わりの無いことに気付く。まして「イギリス人の患者」を代理父と見なし、時に神聖視するHanaは、Caravaggioの話を請け合おうともしない。このように、「イギリス人の患者」を名前、国籍、あるいは政治的スタンスにより、何らかの文脈に位置づけようとする試みは意味をなさなくなり、彼の存在をめぐる「真実」は無化されてゆくのである。

さらに、アメリカによる日本への原爆投下に衝撃を受けたKipは、「イギリス人の患者」に銃を向け、“‘American, French, I don’t care. When you start bombing the brown races of the world, you’re an Englishman. You had King Leopold of Belgium and now you have

fucking Harry Truman of the USA. You all learned it from the English' " (286) と怒号する。Kip にとっては、たとえ「イギリス人の患者」が戦争の犠牲者であるとしても、この男がアジアの有色人種の敵であることに変わりはない。同時に、「イギリス人の患者」自身は、自分が何者であるかという「真実」を周囲の者に委ね、Kip が言うところの「イギリス人」の罪を負って、銃口に身をさらすことに何の躊躇もない。このように、「イギリス人の患者」をめぐり、人々が作り上げた「物語」は、いわゆる「真実」と矛盾することも、否定されることもなく、"the sweep of the history"におけるひとつの「歴史」の "cul-de-sack"として受容され、この小説における「歴史」というタブローを紡ぎ出すひとつの細部となるのである。

このように、ものごとの「真実性」が無化されてゆく中で、それぞれの登場人物が携える個々の「物語」は、第三点目の、複数の視点を並置させたコラージュ的手法へとつながっている。「イギリス人の患者」をめぐって、Caravaggio、Hana、Kip は、それぞれの立場から各々の「物語」を作り上げ、読者は、何が「真実」かを問うのではなく、複数の視点から浮かび上がってくるそれぞれの「物語」を受けとめることになる。ここに見られるのは、直線的、実証的、合理的に、一定点から語られる「歴史」ではなく、むしろ、複雑多様で分散的な、個々の「物語」の集積である。そしてそれらの暗示がイマジネーションの翼に委ねられ、緩やかに重なり合い、交差してゆく——それこそがこの小説 *The English Patient* をとおして読者が目撃する「歴史」の生成の場である。

この「歴史」の複雑な多様性と非組織性を、小説全編を通じて最も顕著に提示しているのは、ジャンルを超えて、あらゆる素材を自在に切り抜き、張り付け、時には加筆をほどこしてゆくコラージュの手法である。まず、「イギリス人の患者」そのものが、多種多様な知識と記憶の断片の集積であることに注目したい。ここで、「イギリス人の患者」が所有する Herodotus の *The Histories* と、彼自身の存在とのアナロジーは明白である。Herodotus はペルシア戦争について記述すると前置きしておきながら、過去の出来事とともに、本筋とは無関係と思われる数々の伝説、流言、そして地誌的詳細を書き記している。同様に、「イギリス人の患者」は、素材のジャンルにとらわれないコラージュとして存在する。彼は、とぎれとぎれの過去の記憶と、脈絡のない雑多な情報——オアシスの町、後期メディチ家、Kipling の文体——等について語り、彼の "commonplace book" (96) である *The Histories* には、彼自身が蒐集した様々な情報が書き加えられ、あるいは挟み込まれ、彼なりのコラージュが編み上げられている。こうして、彼の記録と記憶の在り方そのものが、直線的な時間の推移、出来事の意味性や目的性を重視する近代合理主義的科学的「歴史」観を無化しているのである。

さらに、小説の作品構成上の手法に眼を移すならば、4人の登場人物をめぐる時空を超えたそれぞれの挿話もまた、一見ばらばらなように見えながら、出来事の不連続性や、無目的性、多様性を表現することで、相互に有機的な結びつきを見せ、構築物としての全体ではなく、変幻自在な総体としての「歴史」の諸相を提示している。例えば、爆弾除去についての高度に専門的な記述は、Kip の「物語」に手に汗握る緊張感をかもし出すとともに、「西洋文明」の科学技術開発の顛末が、殺人装置に他ならないことを示し、原爆投下への前景を用意している

(Chap. 7 *passim*)。また、戦いと死に疲れ果てながらも Florence の廃墟で Hana が見せる無垢と勇気の一連のエピソードは、「西洋文明」が破綻を来した後の生存者にふさわしい生命力を示唆している。このように、小説 *The English Patient* におけるコラージュ的描出手法は、統辞的な全体を組織するための近代合理主義的科学的「歴史」観を否定し、個々の「物語」の交錯と展開の中から、「歴史」が織りなされてゆくことを具現している。

ここで、小説 *The English Patient* に通底する万物流転の理を改めて思い起こし、過去の文学テクスト、即ち活字として定着した数々の「物語」の繰り返しについて考察する必要があるだろう。なぜならば、この「物語」の繰り返しと、そこから生まれる新しい「物語」の創造は、この小説独自の「物語」観と「歴史」観を反映させているからである。それは、自ら見聞した「物語」の忠実な復唱を信条とした Herodotus の「歴史」観とは一線を画す点でもある。「歴史は繰り返す」と人が言うとき、それは同じ出来事の寸分たがわぬ反復を指すのではなく、むしろ、あらゆる周辺的差異を含めてなお、人間が過去のそれと似通った出来事を何度となく体験することに対する認識を意味すると考えられる。そして、小説 *The English Patient* における「物語」の繰り返しについては、その周辺的差異こそが、新しい「物語」の創造の源として重要なのである。

小説 *The English Patient* において Herodotus から引用されるテクストは、時間を、そして空間を超えた新たな文脈において、多少の「ずれ」を伴いつつ語られる。Herodotus が伝える Lydia 王 Candaules とその王妃、王の腹心 Gyges の血生臭い三角関係の「物語」は、Katharine がそれを朗読してみせる時、「イギリス人の患者」と彼女の悲恋の契機となり、その予言となる。Lydia 王朝の繁栄が未来永劫のものでない点には、Herodotus と小説 *The English Patient* に共通の、万物流転の主題が表れている。しかしながら、誇り高き王妃の命に従って王を討ち、後代にその報いを受けた Gyges の「物語」と、「イギリス人の患者」の運命は、やはり似て非なるものである。「イギリス人の患者」は Gyges のように新王としてつかのまも君臨することはあり得ない。五代にわたって繁栄する Gyges の王朝とは異なり、「イギリス人の患者」をとりまく世界は既に終焉を迎えようとしているのであり、この違い——即ち、繰り返される「物語」におけるこの「ずれ」——こそが、「西洋文明」の没落という小説 *The English Patient* のひとつの主題を際だたせるのである。

この主題は同様に、「西洋」文学の金字塔への言及においても、それらの周知のテクストが配置された新しい文脈における、微妙な「ずれ」によって、奏でられている。例えば、Hana が *The Last of the Mohicans* に読みふけるとき、それはアメリカ建国期の自然と「西洋文明」の相克を想起させ、そのテーマは小説 *The English Patient* において「西洋文明」が20世紀にもたらした核の悲劇につながっている。そして、*The Charterhouse of Parma* の Fabrizio のように、小説 *The English Patient* の登場人物達は、Parma ならぬ Florence 郊外の、もと修道院にしばし安住の地を得ているが、そのイタリアルネッサンスゆかりの地が廃墟と化していることは、やはり「西洋文明」の凋落を示唆するものだと言えよう。

最後に、小説 *The English Patient* における他の文学作品への言及の中でも、とりわけ、

Kipling の小説の繰り返しは、この小説における「物語」の自己増殖的創造力を反映している点で注目に値することを指摘しておきたい。Kipling の主人公 Kim は、Cooper の Natty Bumpo 同様、白人でありながら異民族の中で育っており、欧米人達の間に暮らす Sikh 教徒 Kip の鏡絵である。また、人種、国籍を超えた交友、という点で、Kip とその師、Lord Suffolk、あるいは Kip と「イギリス人の患者」との親交は、Kim とラマ僧との道行きの写し絵となる。そして、「イギリス人の患者」は、Hana に細かく朗読の仕方の注文をつけるほど、Kipling に精通しているのだが、Hana による Kim の朗読は、「イギリス人の患者」が聞いていようがいまいが、気の向くままになされ、彼の耳に届く「物語」は常に分断化されている。それでいてなお、Kim の「物語」は、Kip の登場への前景を用意して、新しい「物語」へと展開する力を秘めている。語り手が、"All this [reading of *Kim*] occurred before the sapper entered their lives, as if out of this fiction. As if the pages of Kipling had been rubbed in the night like a magic lamp" (94) と言うとき、ここにはさらに、「アラディンと魔法のランプ」というもうひとつの伝承が滑り込まされていることも見逃せない。こうして、デフォルメされた過去のテクストの引用、再編集が、その微妙な「ずれ」を伴いながら、独自の「物語」を編み上げてゆき、小説 *The English Patient* という新たなテクストの誕生を可能にするのである。

このように、一見不連続で分散的な「物語」の間にも、そこに「物語」本来の表現力——即ち、それぞれの文脈において読者の想像力を喚起し、新しい「物語」へとつながってゆく創造力——がある限り、各々の「物語」は、その生命力を増殖し続けることができる。そして、それは小説 *The English Patient* を貫く万物流転の世界観に新たな生命力を賦与し、「歴史」の担い手としての個人の「物語」の重要性の確認、「真実性」の超越、複数の視点の並置とあらゆる素材の活用を可能にするコラージュ的描出手法の有効性を証明するものである。これらの「物語」が直線的な秩序、意味性、目的性の呪縛から解き放たれ、ある時は自在に交差し、またある時は分散的展開を見せるとき、それらの相互関係性の中から暗示的、比喩的、象徴的に、「物語」本来の表現力が生み出すもの、それこそが、この小説 *The English Patient* が具現する「歴史」に他ならないのである。

Michael Ondaatje の小説 *The English Patient* は、「西洋文明」の没落を取り扱った「歴史」小説としての局面を持つが、この小説は、世紀末を迎えた今、従来の近代合理主義的科学的「歴史」観が既に有効ではないことを前提として、本来の「歴史」は様々な複数の「物語」の自在な交錯の産物であり、それらの個々の「物語」の関係性の中から編み出されるものであることを提示している。20世紀、人類は二つの大戦を経験し、その後、我々をとりまく状況は大きな変貌を遂げ、未来への展望に明確なものは何もない。すべては流転してゆくかのようである。しかし、この作品には、過去のテクストを再確認し、再編集するだけではなく、むしろそこから新たな「物語」の創作の展開を探る姿勢を読みとることができる。そして、「歴史」はただ繰り返すのではなく、個々の「物語」には常に新たな要素が織り込まれ、より複雑な局

面を露にしながら語り直されてゆく中で、新たな「歴史」が紡ぎ続けられてゆく。それゆえに、小説 *The English Patient* は、「歴史」と「物語」が交差する場における、想像的かつ創造的探求の書である。

Notes

＊本論は1997年10月11日、慶應義塾大学に於ける日本アメリカ文学会第36回全国大会に於ける口頭発表に加筆したものである。
また、この論文は、1998年度神戸女学院大学研究所研究助成金の成果である。

1　Ondaatje はいくつかのインタビューにおいて、Herodotus 流の「歴史」観への共感を示している。例えば、執筆時の入念なリサーチについて、自分を "historian manqué"と考えるか、という問に対して、"I've always loved history in an amateurish way but history as Herodotus understood it ——I prefer believing everything I'm told and writing it down, not worrying too much whether it's true" (Sally Laird, "Man of Magic Tongue," *Observer* 18 Oct. 1992 : 59)と述べ、近代の合理主義的科学的「歴史」観とは一線を画することを明言している。さらに、

> I love that sense that history is not just one opinion. I prefer a complicated history where an event is seen through many eyes or emotions and the writer doesn't try to control the view-point. It is only when one steps back from those small things which are knitted together in the in the narrative that one can see, as Henry James said, "the figure in the carpet. (Beverly Slopen, "Interview with Michael Ondaatje," *Publishers Weekly* 5 Oct. 1992 : 48)

と語り、複雑に絡み合う個々の物語の関連性から「歴史」が浮かび上がることを唱えている。

2　Herodotus、およびその受容の研究に関しては下記の書を参考とした。
藤縄謙三，『歴史の父ヘロドトス』(新潮，1989) ; A. Momigliano, "The Place of Herodotus in the History of Historiography," *History* 43(1958) : 1 −13 ; 西澤龍生,「ヘーロドトスに於ける歴史眼」,『西洋古典学研究』13 (1965) : 63−74 ; Aubrey de Sélincourt, *The World of Herodotus* (Boston : Little, 1962).

3　*The English Patient* におけるこの箇所の引用は下記の通り："For those cities that were great in earlier times must have now become small, and those that were great in my time were small in time before. . . . Man's good fortune never abides in the same place' "(142).

4　Kip の翻意の唐突さに対する批判としては、Nicholas Spice, "Ways of Being a Man," *London Review of Books* 24 Sept. 1992 : 5、及び Craig Seligman, "Sentimental Wounds," *New Republic* 15 Mar. 1993 : 41を参照。

5　古代ローマの Cicero は、「詩」が "pleasure"を提供するのに対し、「歴史」は "the truth"を基準とするといい、"in the works of Herodotus, the Father of History . . . [o]ne finds innumerable fabulous tales"と述べ、Herodotus の著作における信憑性を疑問視している(Marcus Tullius Cicero, "De Legibus [The Laws]" in *Cicero : De Republica, De Legibus* [with an English Translation by Clinton Walker Keyes], Loeb Classic Library 37, London : Heinemann, 1959, 301)。他方、現代の史学者 Aubrey de Sélincourt は、実証的知識偏重主義に傾いて「真実」の表記をこそ正しい「歴史」であるとする風潮に異論を唱え、 "history is, or can be, the most poetic of the sciences"と位置づけ、Herodotus においては、"we get, over and above a mass of historical and legendary information, an immediacy of impression and a sense of life in the actual living of it which scientific history cannot give"とその表現力を高く評している(Aubrey de Sélincourt, *The World of Herodotus,* Boston : Little, 1962, 36)。

Works Cited

Herodotus. *The Histories*. Penguin Classics. London : Penguine, 1996.

Ondaatje, Michael. *The English Patient*. New York : Vintage, 1996.

（原稿受理1998年11月30日）